SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

コロンビア・アンデスの旅：静大コロンビア・アンデス学術調査隊の日誌から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-11-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 土, 隆一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00025884

静岡地学　第12号（1968）

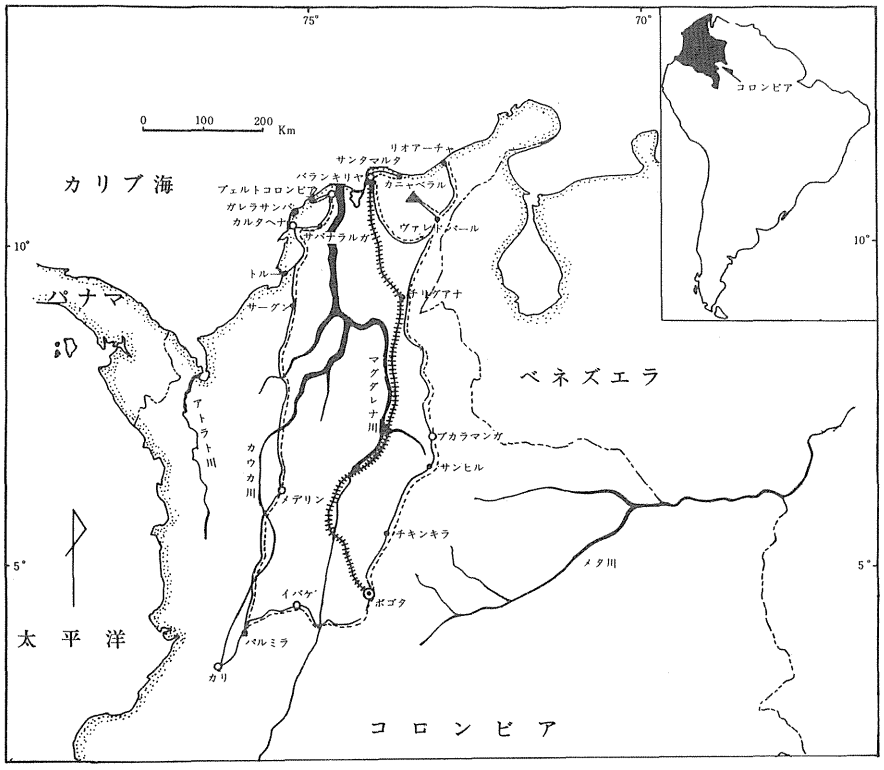
コロンビア・アンデスの旅

－静大コロンビア・アンデス学術調査隊の日誌から－

土　　隆　一

ボゴタの印象

ロサンゼルス，メキシコを経てパナマの空港を発つと間もなく，眼下に緑の大陸が近づいてくる。海岸までいっぱいに迫ったジャングル，その中をうねうねと蛇行して真茶色の川がゆっくりと流れている。“いよいよ南米に来たか”との実感がひしひしと湧いてくる。密林の大平原が終ると今度は山また山，日本とちがって，とてつもなく規模の雄大な山脈，遠くに白雪を頂く5,000m級の高峰群，まさしくアンデスは南米の屋根である。



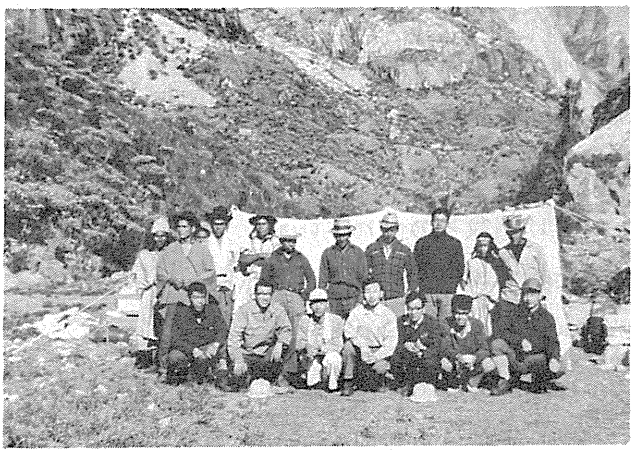
コロンビア航空“アビアンカ（AVIANCA）”のスチュワーデス達は真紅のマントを身につけていて，なかなか粋な感じである。さながらスペインの闘牛を想い出させる。英語のアナウンスもあるが，アクセントから何からスペイン語的でさっぱりわからない。

コロンビアの首都ボゴタについたのは6月8日の午後3時頃，機外に出ると寒い。夏，しかも赤道も間近いというのにコートを着たくなるような涼しさだ。税関や空港のざわめき，もうすっかりスペイン語の国である。英語らしいものも全く聞かれない。“コモ・エスタ・ウステ（Cómoesta′ usted？）”（はじめまして）“ブエノス・タルデス（Buenas tardes）”（今日は）などという挨拶も，メキシコで少し練習してみたが，どうもまだとってつけたような感じである。

空港長が挨拶にみえる。そして世界に誇るコロンビア・コーヒーを御馳走になる。待ちかまえていた新聞記者の人達に囲まれたが，幸い，この時は出迎えて下さった大使館や三菱商事の方々のお蔭で，後はどうやら切り抜けて町の中に滑り込むことができた。

町の中央には，27階建の高層ビルが建ち並び，御自慢の唯一の立体交差道路がある。まわりを中生層からなる山地で囲まれ，アンデスに抱かれた盆地につくられた町，人口は170万，スペイン風の赤煉瓦が印象的な大都会である。しかし，あちらこちらで見られる中世風の古い建物，海抜2,600 mという涼しさが，何となく寂しさを感じさせる。

ここでは春夏秋冬はない。乾季と雨季が交代し，年間平均気温14°Cというから，いつも静岡の11月頃ということになる。高原のためか，朝夕の気温が非常にちがうのも特徴だ。日中は陽がさせば薄着ですごせるが，夜は暖炉に火がはいり，街頭にはオーバーを着こんだセニョールや毛皮のセニョーラが白い息を吐いて歩く。まるで一日のうちに春夏秋冬が駈け足でめぐっているようだ。

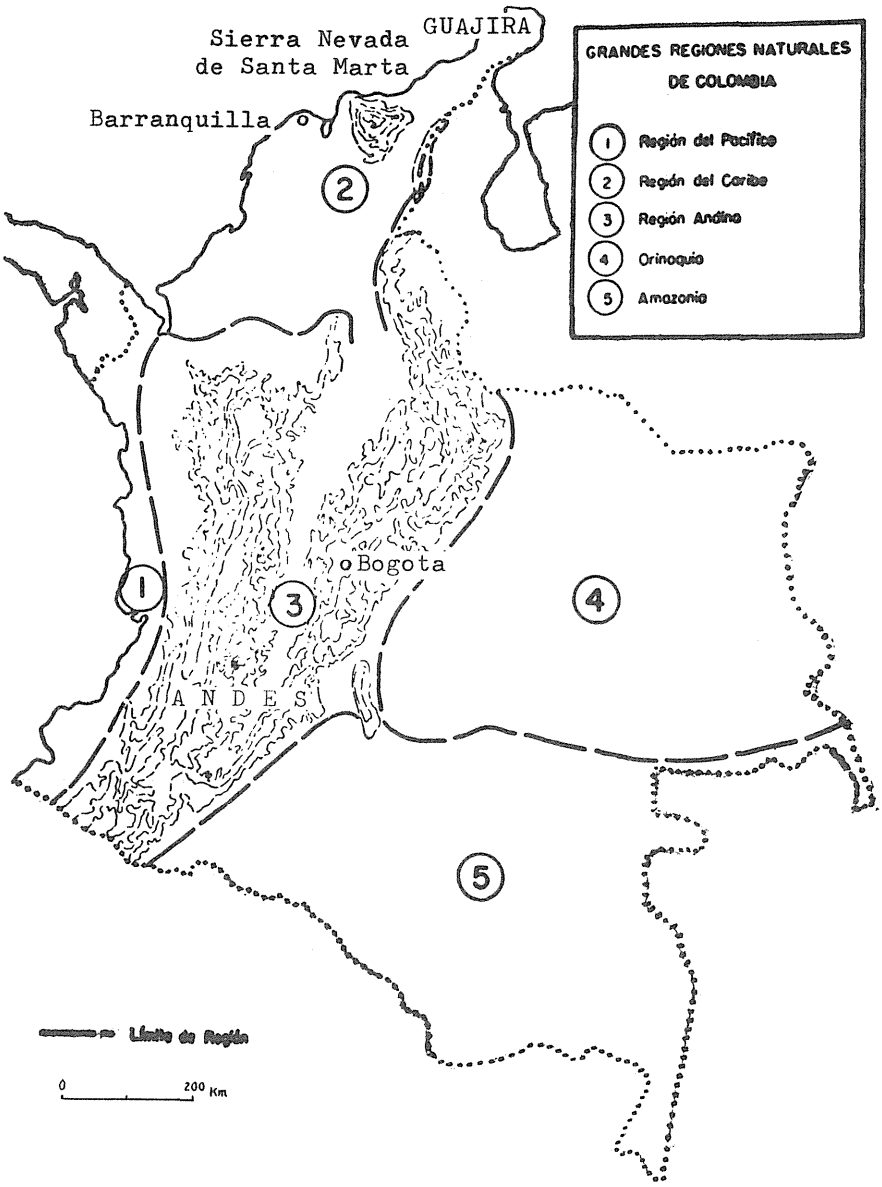


メジョアカ（海抜3470 m）にて，前列左から和田，山本，高橋，土隊長，小久江，杉本，太田の各隊員，後列右から3人目安藤隊員。

街を歩くと驚いたことには自動小銃を持った警官が多い。何事かと聞いてみると，米国のキューバ派兵反対デモの時に出された戒厳令がまだ続いているのだそうだ。しかし，町の人達の表情からは戒厳令下というような厳めしさは全く見ることができない。親日国ときいていたが，事実“ハポネス／Japonés／”（日本人）と言って，我々に対してとても愛想がよい。我々の揃いのブレザーコートにつけられた日の丸も手伝って大勢の人達から気軽に話しかけられる。“コロンビアはどうだ”と言うので，“日本人に親切なので大好きだ”と言ったら大喜びしていた。それにここの人達の背の高さが我々の気に入った。米国では大抵上を見上げてしゃべらなければならないが，南下するにつれて段々と低くなり，コロンビアでは我々と全く同じ位の背格好になっている。黒い眼や茶色っぽい皮膚も何となく親しみがもてる。日本の驚異的な戦後の発展，学問的レベルの高いことなど我々がコロンビアのことを知っている以上に，多くの人達が日本のことを知っているのには驚いた。日本ではコロンビアと言っても，コーヒーの国，南米の北端にある国と答えられる人にさえ中々出会わないようだ。きくところによると朝鮮動乱の時，国連軍に参加して多くのコロンビアの人達が日本に立寄り，その好印象を宣伝したからだという。この国でも日本製のトランジスタラジオとジープが活躍している。

コロンビア料理はボゴタでよく御馳走になったが，特有のどぎついこってりした油っこさと濃い味はなかなか我々の舌になじまない。赴任して間もない日本の商社の人達なども，下宿で毎日コロンビア料理をたべさせられると胃の調子がどうもおかしいそうだが，無理もない。私も一計を案じて，ホテルの食堂では，ふかしたじゃがいも，いためた人参と豆，アロス・ソロ（Arroz solo）

（御飯だけ）などと一品ずつ注文することにした。メニューの料理名を言わないでこのようにすると比較的無難なものが食べられる。ホテルの給仕が不思議がって“お前さんはまだお腹をこわしているのか”と心配してくれたりした。カレーライスもハンバーグステーキもないが，アロス・コン・ポリョ（チキンライス）があって，外出した時の昼食にはきまって注文した。これだけが我々の慣れている味にやや近いのである。寒いところから暑いところまである国なので，野菜も果物も日本で見られるものはほとんどある。ただ，さすがに味噌としょう油はない。在留邦人の方々のお宅では久しぶりに御手製のとうふをおいしく頂いた。



コロンビアの地勢図

根拠地〝バランキリア〟

首都ボゴタから北へジェット機で50分，カリブ海に面した港町バランキリア（Barranquilla）に向う。今回の調査の根拠地でもある。飛行場へおりたつと，今度は真夏の熱帯の太陽がじりじりと照りつける。ボゴタではまだ寒い位だったブレザーコートは忽ち汗びっしょりでとても着てはいられない。まわりの人達も半袖のYシャツ一枚といった軽装である。やっと南米の熱帯にきたような気がする。それにしても何と気候のちがいの大きいことか。宿舎のホテル，ヘノハ（Genova）はイタリア人の経営で中級といったところ。お粗末な外観に似ず中はきわめて清潔である。プールもあるし，3食つきで1日60ペソ（Peso）（約1,300円）だからかなり安い。おまけに，ベランダから毎晩映画をただで見ることができた。というのは，この町の大衆映画館はしばしば屋根がなく，しかも夜だけしか上映しないのである。雨は少ないし，日中は暑いからにちがいない。入場料

は70円位で，上映する映画は毎日変り，一週間するとまたくり返すしくみになっている。お蔭で結構毎晩我々を楽しませてくれた。

夜になっても決して涼しいとは言えない。しかし，窓をあけると爽かな涼風がはいってくる。乾燥地帯だからだろうか，日本のようなじっとりしたむし暑さは感じられない。毎夜シャワーを浴びる。風呂は勿論ない。窓をあけて，かけぶとんのないベッドにごろりと横になる。マラリアの予防薬を一生懸命のんだりしたが，幸いにもここでは蚊もほとんどいない。

朝，じりじりとくる熱気に思わず寝坊したと思って飛び起きる。何のことはないまだ7時前である。外を眺めると陽はすでに高く9時か10時の感じがする。こうして気温はぐんぐんのぼりはじめる。朝のシャワーを浴びる。日中は40度近くなることもしばしばで特に昼過ぎはぐったりするほど暑い。そのせいか会社も官庁も郵便局も，また商店などもはやばやと朝8時には一斉にはじまる。そして正午から2時ないし3時までは昼休みである。この頃の町なかは至って静か，すべての店はよろい戸を下ろし，鍵を厳重にかけ，町中の活動が停止する。大抵の人は家に帰って家族と昼食をとり，ゆっくりと昼寝を楽しむ。木陰のベンチなどに寝そべると気持ちのよいほど涼しい。3時頃から仕事がはじまっても気分がのりはじめる頃にはもう終業である。どうやらここでは午前中だけが仕事の時間らしい。

夜は8時過ぎにはほとんどの店が戸を閉める。土・日2日間の休日を除いてコロンビアの人達の夜は比較的早い。朝が早いせいだろうか。そして休日には徹底して人生を楽しむ。と言ってもマイカー族はいない。昼間は野球場などが満員となり，夜はラテン音楽の中で家族どうしの交歓やダンスの花が咲く。早寝早起き昼寝にスポーツ，何と健康的なところだろう／ここはどうも学問するところではなさそうだ。

バランキリヤはアトランティコ（Atlantico）州の州都で人口70万の大都会，どの町へ行っても同じであるが，ここでも町の中央にはりっぱなカソリックの教会と建国の英雄シモン・ボリーバル（Simon Bolivar）の銅像がある。ボゴタのような高層建築はないが，太陽に輝いた陽気な町，乞食なども全く見られない。何しろ衣料費はかからないし，野菜や果物が豊富なせいだろう。

ガソリンが安いためか，タクシーも町の中ならどこでも5ペソ（110円）ですむ。しかし，メーターなどはないので，ぼんやりしていると6ペソにされてしまう。だまって5ペソをさっとやればそれですむのだが，おつりなどもらうとなるとしばしば計算を間違える。領収書などもよく間違えたりしているから必ずこちらで再計算の要がある。どうもコロンビア人は数学は苦手らしい。市内バスは至るところに走っているがこれはなおさら安い。40センタボ（Centavo）（9円）か50センタボ（11円)で，これまた運転手によって値段がちがうから不思議だ。停留所はないが，市内は直交する道路カレラ（Carrera）とカレ（Calle）によって碁盤目になっているので，四つ角で手をあげればどこでもとまってくれる。みなワンマンカーで美人車掌が見られないのは残念だった。ホテル・ヘノハの食事はボゴタに比べるとはるかに家庭的で，我々には有難かった。朝はパパイヤかパイナップルとバナナにはじまり，卵焼きかトマトを添えた牛肉の薄焼き，パンにコーヒー，昼と夜は同じく果物からはじまり，スープ・牛豚鳥肉・ベーコン・ソーセージ・魚・野菜・スパゲ

ティ・米・ジャガイモ・プラタナなどの組み合せによる洋食風の料理が3皿ぐらいとケーキにコーヒーで終る。この国ではおいしい米が沢山とれ，食事には，しばしば出てくる。しかし彼等は炊いてたべることはしない。あくまでもおかずの一つで大抵いためてでてくる。だから時々固い芯のある米が混っていて，勢よくかんで歯をいためたりした。この国では食事もゆっくり食べるべきである。肉は主食だけあって牛肉も豊富だ。脂はないが何とかたい肉だろう。これも暑さのせいで脂肪の多い肥った牛がいないからにちがいない。魚は大味(おおあじ)で義理にもおいしいとは言えない。パンはホテルのものは上等ではなかったが，町角のパン屋では中々おいしいパンを売っている。バナナは台湾や東南アジアのものにくらべて香りがほとんどないのが特徴だ。しかし毎朝たべるなどということは日本では一寸うらやましい。プラタナというのは料理用バナナで全く甘くもないしろものだ。じゃがいもは原産地だけあってふかしてもいためてもその味は格別である。

バラキリヤの町の中心，シモン・ボリーバル通りの裏手の川沿いの街道一帯は市場になっている。もっとも庶民的なところだが，まことに不潔できたならしい。泥だらけの地面に野菜を売っている人，乾魚に無数の蠅がたかっている魚屋，ごったがえす道路の両側に，あるいは屋台を引張り出し，あるいは本箱をひっくり返して台を作り，あるいはむしろをしいて売物をのせて客を呼び，わめき，どなり合い，大変なさわぎである。さらに，このあたりはバスの終点でもあって何10台というバスが絶えずブーブーとひしめきこのさわぎにわをかける。ともかく食物から雑貨に至るまで何でも揃うし値段は格安である。バナナ10数本1ふさが半ペソ（11円）だからうらやましい。我々がバランキリヤでなすべきことの一つは山地食糧の調達だが，何分にも大量なのでこの市場へもよく出かけた。辞引片手に怪しげなスペイン語で値段の交渉は食糧担当の和田隊員だ。60ペソだというのであっちでは40ペソだった，もっとまけろというと，じゃ50ペソにするという。気長にねばるほど安くなる。セニョーラ（奥さん）は中々手ごわい。そういう時はセニョール（主人）を呼んでもらうと値引交渉がしやすい。何しろ相手は気長で知られたラテン民族だ。しかも決して怒ったりしない。短気は負けである。

バランキリヤの税関で日本から運んだ調査器材を受けとるのに予想以上の2週間もかかってしまった。装備・器材担当の安藤・太田両隊員は山にはいる時期が遅れるので気が気ではない。大使館からの書類を添え，在留邦人の堅川繁樹(たてかわしげき)氏から頼んでもらったり，毎日のように郵船代理店ナベマールや税関に足を運んでやっとのことであった。税関の人達もきわめて愛想がよい。山へ登って何をするのかとか，日本のお茶をのんでみたいなとか世間話はいくらでもしてくれるが肝心の書類はどこをどう回っているのか，さっぱり見当がつかない。きくところによると役所のスローモーぶりは定評があるのだそうで，2，3ケ月はおろか半年位かかることもざら，2週間とは運のいい方だと言われた。

しかし，この2週間のおかげでスペイン語の会話にはいく分馴れてきた。適当な通訳も見つからず，結局皆で何とかやればできないこともなかろうということになった。それに通訳を雇えば1日200ペソ（4,000円）もするのである。

サンタ・マルタ山群へ出発

6月23日，すっかり準備も整った。3台の車で愈々サンタ・マルタ山群へ向け出発。先頭は3トン・トラック，これに器材と食料を満載，つづいて日産パトロール，これらは現地の日産代理店支配人フェルナンド氏の御好意による提供，勿論運転手つき，最後が調査隊の車トヨタマスターラインである。

街を出るとすぐマグダレーナ河（Rio Magdalena）をわたる。幅1Kmほどだが橋はなく，2台のフェリボートが往復する。しかも満員にならないと出ないので，1時間位はすぐかかってしまう。ボゴタへの一級国道がこんな状態である。しかし，コロンビアの人達は悠々たるもの，不平一つ言わずおしゃべりに花を咲かせる。マグダレーナ川はコロンビア国内を縦断する大河，その長さは本州の長さほどもあり，濁った真茶色の水をとうとうと流している。今でもボゴタの近くまで船でさかのぼることができる。

やっと渡り終るとシエナガ（Cienaga），フンダシオン（Fundacion）あたりまでは舗装道路が続く。フェリーをおりた車が一斉にわれ先にと走り出す。ここではダンプは比較的おとなしい。一番うるさい音を立てて，猛然としたスピードで追い越しをかけるのがバスだ。スペイン語でブースだが，車幅がひろく豚みたいな格好をした，大抵はボロ車である。それが時速95Kmから100Kmのスピードで突走る。車体は青赤黄にぬりわけてあって，これもコロンビア国旗の象徴と同じなのだろう。青はカリブ海と太平洋の海，赤は革命の英雄の血，黄は鉱物の富をあらわしている。そういえばこの国は世界最大のエメラルドの産地である。石油もまだ開発はすすんでいないが無尽蔵で，そのせいかバスの運賃はきわめて安い。沼津から浜松位まで走っても5ペソ位のものだ。運ちゃんは大抵がしっかりしていて中々運転も上手だし，何しろタフである。この国では衝突事故などはあまりなさそうだ。しかし，道路わきの牧場や畑に自分だけでひっくり返っている車がしばしば見られる。

はるか彼方に目指すサンタ・マルタ山群を望み，右手に大きな潟湖，左手にカリブ海を眺めながら車は砂州の上を走る。地理的には，ちょうど浜名湖の弁天島を走っているようなものだが，スケールは桁ちがいに大きく，どう見ても箱庭的ではない。水辺には見渡すかぎりマングローブの低い林が続き，乾季で水の干上ったところには葉のない枯木が累々とつづき，ところどころにサボテンがニョキッと生えるといった異様な景色である。小さな水辺の部落のそばにはスペイン風の白い墓，その上には何10羽の真黒なコンドルの仲間がむらがっているのも何かわびしげな景観をそえる。

入江が終ると今度は果しない草原と低いかん木の林，ときにバナナ畑や陸稲の畑もひろがるが一帯は広大な牧場である。その間をまっすぐにはるか地平線まで道がつづく。走っても走ってもうんざりするほど広い。上からは熱帯の太陽が容赦なく照りつける。ときにすれちがう車のもうもうたる砂ぼこり。このあたりはカリブ海からくる湿気がサンタ・マルタ山群のためさえぎられてすっかり乾燥している。南米といえばアマゾンの密林を想像するが，コロンビアのカリブ海沿岸のような乾燥地帯もあったのかと今更のように大陸の広さを身にしみて感じた。

山麓の町〝バレドパール〟

バランキリヤを出発してから266Km，サンタ・マルタ山群の南東麓の町バレドパール(Valledupar)へ着いたのは夜9時すぎだった。ホテル・ロンドレス（Rondless）に泊る。電気もないこの町で，ごうごうと音をたてながら発電機をまわしている位だから一流のホテルにちがいない。なぜこんな町にやって来たかというと，サンタ・マルタ山群を南側の乾燥地帯から登ろうというわけである。北側のカリブ海側は雨が多くジャングルになっていてとても登れないし，今までも誰も成功していない。

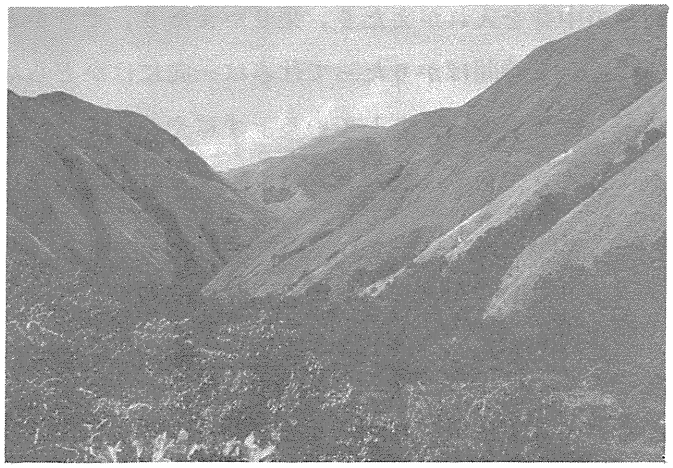
この山群はアンデス山脈本体からは断層でたち切られ，海岸沿いに孤立したような格好をしている。いつ頃どのようにして切り離されたかは地質学上の大問題だ。今回の調査で山群西側のシエナガ(Cienaga）付近を通る新しい2条の南北性横ズレ断層を発見した。ごく新しい洪積世の活動と考えられるので，現在でもこの山塊は動きつつあるにちがいない。しかもコロンビア・アンデスの最高峰はこの山群にある。地図では小さな山群に見えるが，南アルプスをすっぽり包んでしまうほどの広さである。この山群を構成する岩石はミグマタイトおよび花こう岩を主体とし，しばしば閃緑岩・斑糲岩など塩基性岩の貫入がみられる。

バレドパールの標高はまだ230mにすぎないのに夜は実に涼しくて気持ちがよい。翌朝，ここから山地までの我々の面倒を見てくれるという，ここの病院の産婦人科部長プマレホ博士邸へ挨拶に行く。同氏は職業柄山中の部落の人達やインディオに顔が広いし尊敬されているとのことだ。軍隊や警察署長にも挨拶する。何しろ，日本を出る時からコロンビアは危険なところだから気をつけろと誰からも言われてきているし，ボゴタの大使館でもこんな片田舎や山の中の情報は得られない。手くばりは中々大変である。といって国際親善も目的の一つである我々にとって，人を見たら泥棒か匪賊と思えというような顔つきをするわけにもいかない。護身用の道具は何一つ持たず，ろくに撃てもしないのに旧式の猟銃1丁をかかえ，ガイド1人をつけてもらって出発した。

2時間でアタンケス（Atanquez）部落へ到着，ここから先はライトバンは無理だというのでジープ1台を借りる。スコップやつるはしも沢山貸してくれた。なぜかと思っていたが，いやはや大変な道だ。花崗(かこう)岩地帯なので雨が一度降るとぐずぐずの地盤のため大きな溝が沢山できてしまっている。本来，馬に乗って通るべき道なのである。一寸走ってはとまり，道路の補修をし，それをくり返しながら，どうにかこうにか夕方までに海抜1,000mのチェメスケメーナ部落に辿りついた。

チェメスケメーナの人々

ガタプリ川に沿う開けたところ，チェメスケメーナ（Chemesquemena）は一本の道の両側に家々の点在するのどかな部落だ。人口は150足らず。樹々も適当に繁り，緑の草原もひろがる。空気も爽かで全く気持ちがよい。村長さんの好意で小学校に泊る。今は丁度夏休み。学校といっても道端につくられた7坪ぐらいのトタン屋根の小屋である。川原との間にはちょっとした草原の運動場もある。ここなら雨が降っても大丈夫だし，扉には鍵もかかる。道路工事のおかげで一同すっかり



ドナチュイ谷中流部の代表的景観

腹ぺこ，早速夕食の準備にかかる。荷物の整理も大わらわである。気がついてみると，どこから聞いてきたか，沢山の子供達が集まって我々を珍しそうに見ている。貧しいボロボロの洋服だが無邪気な眼をしている。段々と数もふえてくるし，大人達も一緒になって飽きもせず，じっと立って窓という窓からのぞいている。こっちも珍しいが，向うも生まれてはじめて見る日本人だ，きっと珍しいにちがいない。女の人達は洗濯ですり切れるほど古くなった洋服を身につけ，男は腰にマチェーテという刀をぶらさげている。これは草刈りから木を切るのから包丁代りまで何にでも役にたつ。人なつこい眼，のんびりした純朴なその顔，挨拶をするとニコニコして話しかけてくる。見るからに人がよさそうである。我々もやれやれと安心した。

衆人環視の中で食事をするのは何となく気づまりだ。今日から我々も持参の日本食で，味噌汁，漬物，御飯などが出てくる。久しぶりに食べる日本の味。箸を使い，こんなに肉のない食事など彼等にとっては全く不思議にちがいない。朝6時になるときまって村長さんが我々を起こしにきて戸をあける。途端に少しずつ見物人がやってくる。朝から晩まで部落中の人達が交代で我々を見にくるらしい。我々の人気も大したものだ。写真をとろうと子供達にカメラをむけたら大喜びだ。我も我もと集まってきて大変なさわぎ。しかもレンズのすぐそばへ近寄ってくるので何度こちらが退いても中々撮れない。写真なんてどうやってとるものか知らないらしいのである。

ここの人達も朝は早い。ろばと馬の中間位のムーラと呼ぶ馬に乗ってバナナ園の仕事やさとうきび畑へ出かけて行く。よちよち歩き位の子供でも実に上手にムーラを乗りこなす。力が強く温和で脚は丈夫，坂道でも石のごろごろした河の中でも平気でトコトコ歩いて行く。何しろ山地唯一の運搬・輸送機関である。

この部落から先は車は全くだめで，我々は歩き，荷物はムーラに背負わせることにした。借り賃の交渉が大変である。人の好さそうなチェメスケメーナの人達も，こと滅多にない現金収入となると中々ゆずらない。大分ねばったが前例があると言って後へひかない。結局，人もムーラもそれぞれ1日40ペソ（900円）で妥結，人夫8名，ムーラ26頭を借りることにした。大キャラバン隊である。ムーラも村中総動員だ。

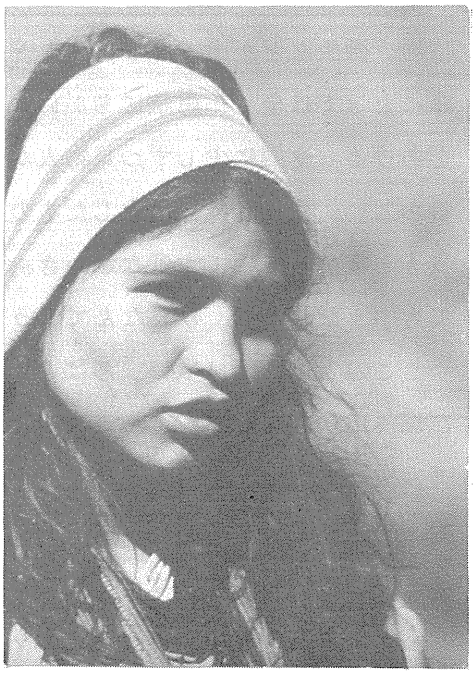
出発がまた大変である。朝8時までにムーラを揃えるとあれほど約速したのに定刻になっても1頭しかやってこない。“あとはどうしたのか？”と言うと，これから探してくると放し飼いのムーラを探しに行く仕末である。26頭も一体揃うのかどうかと心配になる。“大丈夫か？”ときくと“大丈夫だ”と答える。10時位になるとそれでも10頭近く集って来た。荷物を背中に背負わせるのがまた一仕事だ。両側に乗せるのだから2個の荷物の重さが大体同じでなければならない。た

くましい馬も弱そうな馬もいる。そのたびに荷物の中身を入れかえたり，乗せかえたり，そうかと思うと，ムーラがどこかへ逃げて数が足りなくなったり時間ばかりたって仕事は一向にはかどらない。コロンビアの人達は悪気はないが全く呑気で，仕事もゆっくりしている。すばやく，てきぱきということは性に合わないらしい。我々だけがやきもきである。怒ってみたりしてもはじまらない。正午近くになってやっと出発できた。

峠を越えてつぎの部落，海抜1,200 mのドナチュイ（Donachui）へ向う。峠から眺めたこの付近一帯の景観は実に美しい。乾燥地帯なので山はほとんど草地である。谷に沿った水気のあるところだけに熱帯雨林がこんもりと繁る。花崗岩地帯のためにずんぐりとした山のかたち，尾根から裾野にかけて，山肌をおおう芝生のように見える草原の黄緑色と，谷間をふちどるような熱帯雨林の濃い緑色がよく調和して何とも美しい眺めである。山の斜面には草しか生えていないのに，ちょっとでも水のある谷すじにはいると，とたんに樹木があおあおと繁り，時に，熱帯の雨の多い森に見られるチランドシアがまるでサルオガセのお化けのようにあちらこちらからぶらさがっている。一寸，日本ではみられない景色だ。そういうところでは目もさめるような赤や青の輝く色に彩られた蝶が飛びかい，担当の高橋隊員は特に忙しい。

インディオ部落に入る

夕方，目指すドナチュイ部落につく。ドナチュイ部落は，チェメスケメーナの部落との間に比高700 mの峠があり，沿っている川もちがうし，谷も一段と深くなってきた感じである。このあたりになると部落といってもあちらの斜面に2軒，こちらの山かげに3軒と点在しているにすぎない。しかも，もういわゆるコロンビア人達は住んでいない。ここから奥はインディオの世界なのである。しかし，チェメスケメーナの人達もこの辺に農園を持っていてフィンカ（Finca）と称する堀立小屋がある。我々はそこに泊めてもらうことになった。



インディオの女性（15才）

ホテル・ドナチュイなどと愛称をつけたりしたが，このホテル，実は大変な〝のみ〟の住み家だったのである。

インディオ達は，はじめはにこりともせず，警戒気味のいぶかしげな顔をして我々を見ていたが，そのうちに我々の目的がわかって安心したのだろうか，少しづつ連れだって見物にくるようになった。スペイン語で挨拶をすると向うも挨拶を返してくるが，大体むっつりしていて面白いことがあっても滅多に笑わない。その点チェメスケメーナの人達とは全く対照的だ。昔は原住民として大手をふって生活していたのであろうに新しく進出して来た民族に追われ追われて，ついに現在ではこのような山奥の人里はなれたところに，世間との交渉を断って，ひっそりとかくれ住んでいる。そ

の長い苦難の歴史が彼等から笑顔をとり去ってしまったのだろうか。それでも子供達だけは我々に無邪気な笑顔を見せてくれる。

我々の中に医師がいることが知れわたると続々と赤ん坊を抱いたインディオのお母さん達がつめかけてきた。子供の健康を心配するのはどの民族の母親でも同じだ。小久江医師大活躍の場である。お蔭で我々もすっかりインディオ達と親しくなった。

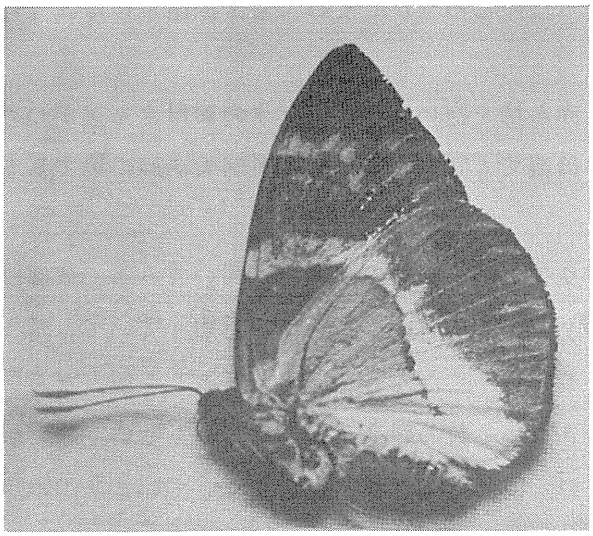
ここに住んでいるのはアラワコ族という部族だそうで，部落一番の実力者に聞いてみる。彼は以前にも外国からの探検隊を案内したとかで，“Very well”という英語だけを知っていて，時々得意気に連発する。“この部落にはどれ位住んでいるのか”“たくさん住んでいる”“何人だ”“たくさんだ”，まあこういった具合の会話しかできない。数の観念がまるでないらしい。若い男達はスペイン語を話すが，女達にはほとんど通じない。彼女達はアラワコ語を話している。山本副隊長は，インディオにきいて薬草の調査のかたわらアラワコ語も勉強したがさっぱりわからない。火（ゲイ），米（アロ），水（ジェ），食料（ザム），有難う（ズニワババー）といった具合である。語り伝え言葉なので字は持っていないらしい。彼等の衣服は自分達の家のまわりに栽培しているリュウゼツランの仲間の繊維から作ったもので，ちょうど柔道着をまとっている感じである。男は同じもので編んだ深い帽子をかぶり，女達は首に赤青の玉でつづった沢山の首飾りをつけている。赤ん坊は幅の広い布で背中におぶっているが，その布は頭にかけている。丸顔ではなく面長で，黒い眼，黒い髪，どう見ても風貌は東洋的である。ただ，彫りが深く，鼻が高い点が日本人とちがう。顔かたちが整っていて中々美人である。惜しむらくは手足が泥だらけ，垢だらけで，風呂にでもはいってごしごし洗えば本当に別ぴんさんになるにちがいない。実力者の奥さんだけは洋服など着こんでしゃれていた。コロンビア人達の部落の一番近いところだけあって，いく分文明社会ズレしているのかもしれない。時々は町にいって鍋やポリバケツなどを買っている。

彼等は扇状地や段丘の山ぎわのところに土と石と竹と木の葉でつくった家をかまえている。一寸見ると昔の日本の農家のような感じだ。燈火がないので中は暗く，しかもたき火をするのでけむくて中にはとてもはいれない。勿論床はなくいきなり地面である。馬小屋みたいに柱が沢山あって室がわかれているらしい。一軒の家から大人や子供達が20数人も出てきたのでびっくりした。インディオのお嬢さんにも会いたかったが，15才位ではもう赤ん坊を抱いた奥さんだし，あとは子供ばかりで，残念ながらとうとう会えなかった。

彼らの主食は，プラタナ（料理用バナナ），とうもろこし，ユカ（いもの類）などで鶏を飼い，家の庭にはサトウキビをひく機械があって，これで黒砂糖をつくる。ほとんど自給自足だが，塩だけは一番困るらしい。

コロンビアの蝶蛾類

蝶と蛾の採集は今回の我々の調査の大きな目的の一つである。なぜ南米あたりまで採集しに行ったかというと，南米は世界の蝶蛾類の発生地の一つであるし，蝶をとってみてもコロンビアだけでも日本の10倍，ざっと2,000種はいるだろうといわれている。しかもサンタ・マルタ山群の周辺は



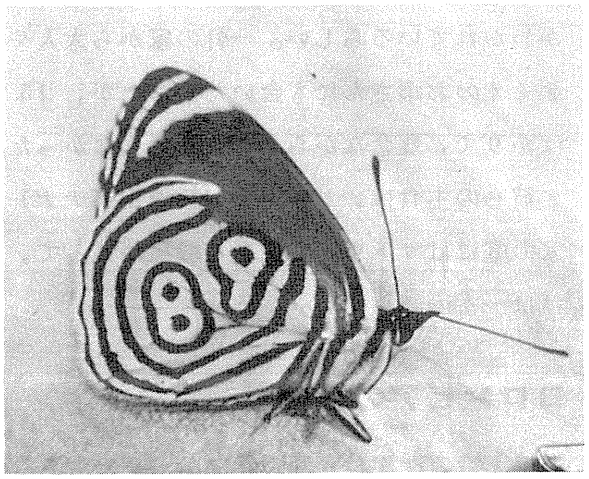
蝶との中間型といわれる蛾 *Castnia*

まだほとんど研究されていない状態なのである。

今回の調査で一番大変だったのは蛾の採集だ。何しろ蝶のように昼間できないし，夜やらなければならない。しかも，夜は危険だから作業や車の旅行は控えるように誰からも言われているので，軍隊の宿舎の近くでやったり，個人の敷地内を借りるように交渉したり大変な手数がかかる。幸い山の中ではどこでも危険なく大っぴらにやることができた。それでも，場所を見つけてやっと準備をすると今夜は風が強いからだめだという。担当の杉本隊員もがっかりだが，我々もやれやれである。電気がないので発電機を運び，燃料のガソリンを用意し，白い幕を張り，螢光燈を灯すわけで，道具の重量は80 Kgにも達する。昼間はキャラバンをつづけ，日没から夜半まで採集するのだから体力の方も大変である。部落の近くで準備をすると，コロンビア人もインディオも一体何がはじまるのかと続々集まってくる。映画でもやるような舞台装置だ。“今夜は見物人の方が多いね”などとひやかされながら，杉本隊員はこれでは人が多くて蛾がこないと渋い顔である。蛾が飛んできだすと，そこはお人好しで世話好きなコロンビア人だ，早速何人もの学術調査の手伝いが名乗りでる。ところが，この協力者達は指でいきなりつかまえたり，服ではたき落したり，とれたとれたと大喜び，ああ，折角の珍しい蛾も台なしである。

約1,000個体の採集標本のうち，日本との共通種が何と3種もとれたそうで面白いことだ。目指していた，蛾と蝶の中間型といわれる，中南米特有の昼間飛ぶ蛾“カストニア（*Castnia*）”も3匹採集できた。この仲間は触角の先がふくれていて見かけは蝶の格好をしているが原始的で蛾の特徴をそなえている特異なグループである。これで蛾から蝶への進化の謎を少しでも解こうというわけである。

一方，山にはいると高橋隊員がつぎつぎととってくる美しい蝶にひかれて，捕虫網をふり回す，にわか昆虫学者もふえてきた。蝶はスペイン語で“マリポーサ”（Mariposa）だが，コロンビア人達に“彼はマリポーサだ”と高橋隊員のことを紹介したらゲラゲラ笑いころげた。マリポーサは女の尻を追いかける人という別の意味があるのだそうである。そういえば，コロンビアも混血の国で美人が多いが，残念ながら同隊員は蝶の尻を追

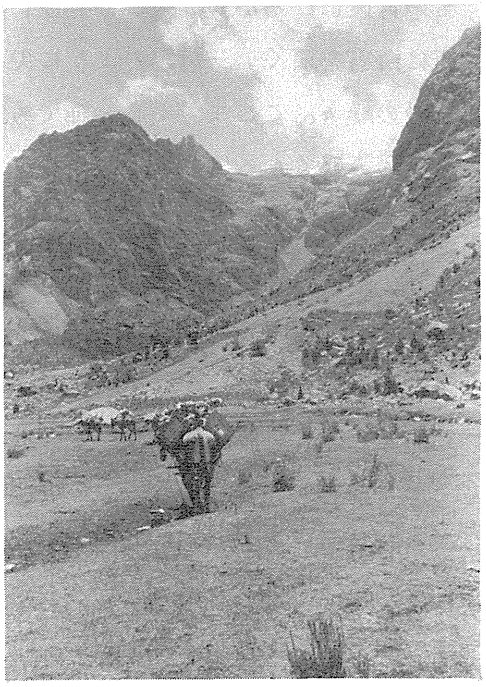


真紅のウラモジタテハ蝶

いかけることに余念がない。

ドナチュイ部落で中でも人気があったのは，“オチェンタ・イ・ヌエベ(89)”と土地の人から親しまれているウラモジタテハ蝶だ。これは中南米特産の小型の美しいもので，後ばねの裏側には89という数字の模様がある。しかも前ばねの裏側には目もさめるような赤色で，はねをたてて水辺にとまるとき，ひときわ美しい。この特徴的な赤の色はほかの多くの蝶にも見られたが，このような赤色は日本などでは全く見ることができない。コロンビア航空“アビアンカ”のスチュワーデスも真紅のマントを着ていたし，町を歩いても赤いコートやセーターを着たセニョーラ・セニョリータをよく見かけるし，赤い色はどうやらこの国とは切っても切れない縁があるらしい。今回の調査では約4,000個体もの蝶の標本を採集することができた。3カ月もいればもっと沢山採集できるかと思っていたが，一人では危険なので，必ず二人以上で行動することになっていたし，今日は蛾の調査，明日は地質の，明後日は貝類の，というように皆で協力しなければならないので実際は20日間位しか使えないのである。

初登頂を目指して



U字谷の埋積平原（海抜3600 m）

ドナチュイから先は，インディオもガイドに加わることになった。どうやら縄張りがあるらしいのである。それはいいが，インディオの仕事ののろさには閉口した。出発だと意気込んで見てものんびりと荷積みをはじめる。だからいつも10時過ぎてしまう。いらいらするが何を言っても，わかっているのかいないのか知らん顔をしている。ムーラもついうっかりしているとどこかへ行ってしまう。とにかく，設営担当の太田・安藤両隊員は気苦労である。

ムーラの歩みに合わせてゆっくりとドナチュイ川の谷をさかのぼる。ソグローメ(Sogrome)，サカラクンゲ(Sacaracungüe)とインディオの部落を過ぎ海抜3,500 mのネバディータ(Nevadita)に着く。登呂遺跡のような住居が深い谷の斜面に少しずつ点在する。気温は11度，もう寒くてとても熱帯に来ている実感はない。サンタ・マルタ山群には4種族のインディオがいてそれぞれ別の言葉を持っているという。山奥に行くほど，姿を見せなくなる。背も低くなるし，身なりも貧しい。ネバディータもひっそりと静まり返っている。こわれかけた空家があったので泊ろうとしたら断られた。同行のインディオさえも部族がちがうので駄目だそうである。

インディオ達は馬の鞍をまわりにおき，その中でお互いに体をくっつけ合って寝る。体の下には羊の皮を敷き，汚い毛布にくるまる。寝るまでは皆でコカの葉を嚙み，ポポロという粉をなめ，長い間楽しそうに話し合っている。薄着のくせに寒さも一向平気らしい。一方，コロンビア人達は寒

い寒いを連発，我々のシャツやズボンを貸してやる仕末だ。彼等は食事も決してインディオと一緒にしない。別々の皿にわけてやり，それぞれ輪になって食べている。コロンビア人は箸を上手に使っていたが，インディオは手でたべていた。

最後の部落メオリヤカ（Meollaca）も過ぎ，森林限界も近づく。上方に荒々しい岩肌の山稜がそびえてくる。海抜3,300 mではじめて氷河が運んだモレーン（Moraine）の丘が見えてきた。谷はU字谷となり谷底は急にひらけ，平坦な草原がひろがる。足下に高山植物が咲き乱れ，澄んだ小川が音をたてて流れる。いくつかのモレーンの丘を越え，平坦な草原を過ぎ，キャラバンはゆっくり高度をあげていく。実に牧歌的だ。3,900 mになると，はじめてモレーンの背後に湖がたたえられるようになる。澄み切った青さと静寂にしずまり返った湖水，その背後にひろがる雄大なU字谷，はるか彼方に白雪を頂く，三角錘のように尖った5,000 m級の峰々。ここまでくると誰でも頂上を征服してみたくなる気持ちにかられるから不思議だ。モレーンにせきとめられてできた美しい湖があちらこちらに見られるようになる。高度4,100 m，もう日本では登れない高さまできてしまった。

U字谷とモレーン背後の湖（海抜3900 m）

ここから先は山本副隊長以下5名のベテランが未踏地域の調査を分担し，私と高橋・杉本両隊員は，35日後の無事再会を約して下山する。山の魅力は捨て難いが，山麓で研究すべきことが山のようにある。

サンタ・マルタ山群主峰群
左からコロン，ボリーバル（5775 m），シモンズ

処女峰を目指した和田隊員（地質担当）の日記にはこう書いてあった。

“4,300 mのキャンプで全員本格的な高山病の頭痛に悩まされた。少しでも力仕事をすると頭がガンガンし，横になってもだるく，頭がおかしくなるのではないかと思った。そればかりか，今日から高所用特別食になるというのに食欲がほとんどないのは残念だ。三日程たつと，しかし，あれほど痛かった頭がすっと忘れるようになおってしまった。早速荷あげの開始である。インディオももう帰ってしまった。我々だけで何回も往復する。ベースキャンプは4,450 m，氷河のカール（Karl）の末端近くに設けた。無数の擦痕のあるカールの中をすすみ，氷をのりこえ，稜線上に前進キャンプをつくる。米国隊もここまではきたが，ここから先は全く未踏の地域だ。期待もファ

イトも一段と大きくなった。尾根を越える急斜面では心臓の鼓動が烈しく，20歩あるいて10分休まないと呼吸がしにくくなる。そうかと思うと3時間もかかって大雪原を越えなければならなかった。ここでは雪が軟らかくてくっつき，10 m ごとに団子のようについた雪をとって歩かねばならなかった。氷河の末端近くでは鋭い氷の裂け目が無数にあってルートをきめるのに苦労した。

処女峰最初の登頂はネバド・テソロ（Nevado Tesoro）（5,200 m）だった。頂上の空が何とも言えない透きとおった青さだった。今までの数々の苦労が消しとび，カメラのシャッターを何回も切っているだけで，あっという間に一時間たってしまった。言葉では言いあらわせない初登頂の喜びを感じたのはうす暗い天幕に帰ってからだった。主峰群地域には，カールと谷氷河が数多く見られ，南面より北面に発達が著しい。南面では氷河の末端は海抜 5,200 m であるが，北面では4,600 m まで達している。

こうして我々は最高峰シモン・ボリーバル（5,775 m）の新しいルートでの登頂に成功し，そのほか 19 の処女峰を征服し，未踏地域の岩石を調査することができた。最奥の 9 つの峰からなる連峰は記念に「静岡連峰」と名づけることにした。”

グアヒラ砂漠を行く

サンタ・マルタ山群の東にカリブ海に突出したグアヒラ（Guajira）半島がある。7月19日，我々はこのコロンビア最北端の僻地を探訪することにした。このあたり一帯はカリブ海側から一年中強い風が吹きすさび，砂塵を吹きあげ，からからに乾いた土地でグアヒラ砂漠と呼ばれている。雨量は静岡の 10 分の 1，わずか年 250 ミリしかない。樹木はほとんど育たず，サボテンの林と草原がひろがるステップ状の砂漠である。ただ，サンタ・マルタ山群の近くは強風が山でさえぎられて雨を降らせるため，そこだけ熱帯雨林となっていて，山地に近づくと，サボテンが姿を消し植物に緑が増し，高い樹木が繁り，ついにうっそうとした密林になるといった具合で，その変化は実に急激で目まぐるしい。

サンタ・マルタ山群最奥の〃静岡連峰〃
（海抜 4980 m）

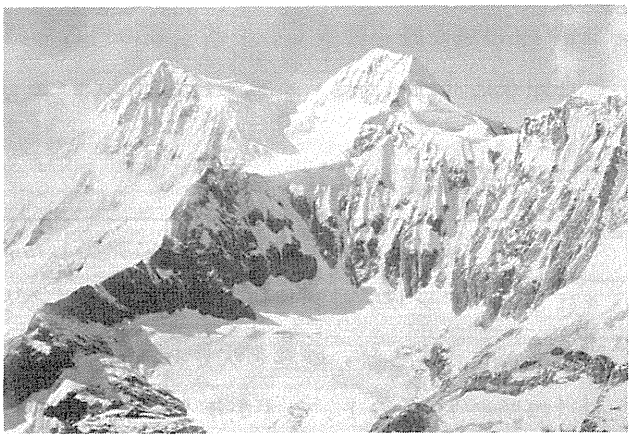
バランキリヤからは サンタ・マルタ山群の北側を通れば距離は近いのであるが，ジャングルのためまだ道もついていない。仕方なく南側を 600 Km も大まわりしていくことにする。この街道は途中で右へ折れるとベネズエラの国境へ通ずるので密輸ルートとして名高く，日本の製品もかなりここから流れこむという。そのためか，途中の要所要所には大抵税関の検問所があってなかなか厳しい。しかも，猛スピードで通り抜けできないように太いワイヤを道の両側の杭にわたしてある。往きは目的を説明すると，どこでも愛想よくフリーパスだったし，なかには，カタカナで書いてある押収したホルモン注射液を持ってきて，これは一体何だ？と検査官にきかれ

たりした。しかし，帰りは岩石や貝など採集品を満載していたので，たびたびひっかかって荷を開いたり，いちいち説明しなければならなかった。こんなに厳重な検査があるのに，それでも大量の密輸がまかり通るのだから不思議である。

乾いた砂利の道をもうもうと砂ぼこりをたてながらまっしぐらにすすむ。両側は牧場になっていて，時々道路は牛の大群に占領される。クラクションを鳴らしても牛はびっくりしてぶつかり合い逆にこちらめがけて走ってくるやつもいる。

北へゆくほど乾燥はひどく，遂に牧場も姿を消し，緑の色は段々少なくなり，サボテンと低い枯木林の丘陵や平原がどこまでもつづく。彼方に蜃気楼が見える。乾き切った原野の一本道を数時間走った後，赤茶けた土地の中に忽然と小さな町が浮び上ってきた。

州都リオアーチャ(Riohacha)に着き，ホテル・パディリヤ(Padilla)に入る。町の中央の一流ホテルだそうだ。しかし，部屋は薄暗くて狭く，セメントの壁がむき出しで，ぎしぎしするベッドが無造作におかれ，金網のついた小窓が高いところに一つだけある。砂だらけの顔を洗おうと思って水道の蛇口をひねったら，汚い真黒な水が出てきた。そのうちにきれいになるだろうと思ったがいつまでたっても汚い。泥くさい臭気さえする。シャワーも仕方なく浴びるがあまり気持ちはよくない。手拭まで黒ずんできた。食堂に行く。かさかさの固い肉，プラタナの揚げたもの，何でも煮こんである特有のスープ，一寸珍らしい米のジュース。じゃがいももここのものは赤くてまずい。西瓜だけが実においしかった。



コロン峰、ボリーバル峰北側のカール

町の通りは大抵砂で埋まっている。砂は遠慮なくシャツの間にはいってくる。道の両側には粗末な錬瓦づくりの貧しい家が並ぶ，しばらく歩くとすぐ町はずれ，その向うに砂丘がつづく。まさに砂の町である。

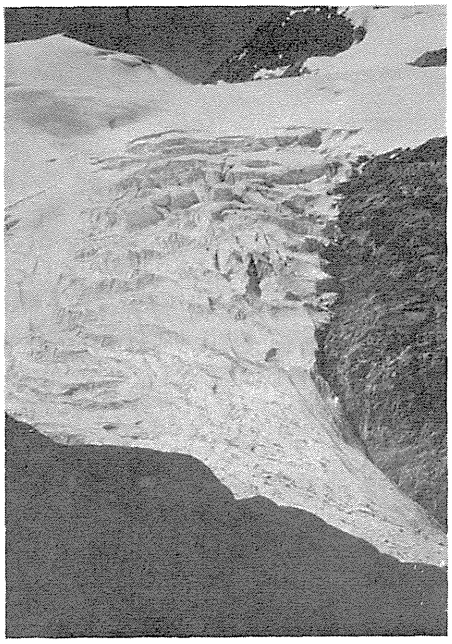
狭い中央通りを行くとすぐ海岸に出る。椰子の木陰があり，ジュースの店とベンチが並び，今日は祭日のせいか多くの人達が涼みながらラテン音楽をかなで，歌っている。全くこんなところでは他に楽しみがないだろう。海辺は強風と荒波，人影すらない桟橋がさびしく沖へのびている。砂の色よりも茶色く濁った汚い海の色。こんなに汚いカリブ海もあるのかと驚いた。

家の粗末さにひきかえ，町の人々は純朴で世話好きだった。明日からの調査にはぜひ案内させてくれと中学生が申し出る。それはよかったのだが，車に乗せると途端にラジオを鳴らしたがり，いっぱいにひねってガーガーとラテン音楽をかけるのには閉口した。彼等にとって音楽は耳で聴くのではなく，体で聴くものなのである。

カリブ海の岸辺

南国的な椰子の木陰，どこまでも青く澄み切った海，海岸をふちどる美しいサンゴ礁，そういったカリブ海を想像していた我々は，コロンビアの海岸にきてすっかりあてがはずれてしまった。

茶色く濁った泥海，おびただしい枯枝や木片が打ちあがっている海岸，こんなにも汚いのかと驚いた位だ。勿論，サンゴ礁など見られない。どうやら，その原因はマグダレーナ川のような大河が滔々と濁水を海へ流しこむためらしい。その他，パナマからコロンビアを経てベネズエラに至るまで，大陸の岸沿いのカリブ海はほとんど茶色く濁っていると言ってよい。大陸から遠く離れたトバゴ（Tobago）とかプエルトリコ（Puerto Rico）などの島へ行って，はじめてカリブ海らしい青い海にお目にかかることができる。

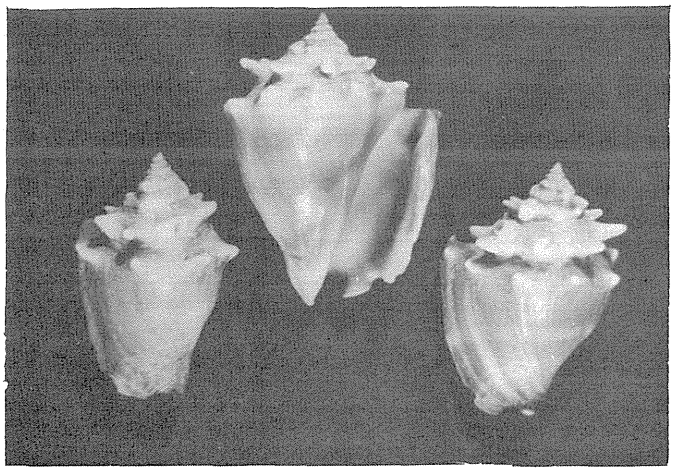


シモンズ峰（5,775 m）西側の氷河

バランキリヤの東，サンタ・マルタ山群の北西側にサンタ・マルタの町がある。コロンビアではここの海岸だけが実にきれいでカリブ海的である。白い砂と緑の椰子，付近を国立公園にしたり，南米のハワイとかマイアミとか言って観光宣伝に一生懸命である。しかし，交通は不便だし — バスは夜行バス，汽車は一週間に1回，飛行機はプロペラ機のみという具合 — ボゴタ，メデリンなど高原の都会の人達が避寒にやってくるぐらいで，日本の観光地とは比べものにならないほど静かだ。それに，夜は“鮫”がやってくるので泳ぐことができない。町はずれの岬にドイツの海洋研究所がある。コロンビアとの共同研究所だが，南米研究の根拠地ともなっている。常に世界各地に研究の眼を向けているお国柄がよくあらわれている。コロンビアで，もっとも学問的な雰囲気で我々を歓迎してくれたのもここである。

カリブ海の貝の代表は何と言っても女王貝（*Strombus gigas* Linne）だろう。ピンクガイとも呼ばれるが，口のところがピンク色に輝いた大きな美しい巻貝である。トランペットに使われることもあるという。バランキリヤの西にあるカルタヘナの町では，観光客の訪れる城跡などで，お土産品として一つ200円位で沢山売っていた。裏側にはどれも丸い穴があけてあるので，なぜかときいたら，さかさにして，そこからローソクを入れて火を灯すと，夜の室内は悩殺的なピンクのムードになるのだそうだ。美人はこわいと言うが美しい貝にも有毒なものが多い。しかし，彼女は美人のくせに中々おいしい。

カリブ海の貝の仲間には，不思議にも遠く離れた東南アジアや日本にすむものによく似たものがいる。これは，100万年以上前のことだが，地質時代の昔，南米大陸が孤立していて，パナマ地峡がまだできていなかった頃，カリブ海の水が太平洋とつながり，赤道に沿ってはるばる西太平洋にやってきたためと考えられ，進化や古生物地理の上から大変興味深い問題を提供する。



ソデガイ類のタイプ *Strombus pugilis*
（カルタヘナ産）

カリブ海沿岸の町では色の黒い，ちぢれ毛のコロンビア人達が目立った。彼等はスペイン人とアフリカ黒人の混血だそうで，スペインの植民地時代に大勢の黒人がアフリカから鉱山労働者として連れてこられたといわれる。大体，コロンビア人はスペイン人とインディオとの混血がもっとも多く，メスチーソ（Mestizo）と呼ばれ約50％を占める。1,500年，スペイン人がはじめてカルタヘナ（Cartagena）に上陸して以来混血がはじまったわけだが，とにかく現在のコロンビア人はスペイン的からインディオ的まで色々である。皮膚の色もほとんど白人から褐色のものまで千差万別だ。我々より色の黒い人も沢山いる。ただ，一般に脚が細く，スマートで眼が大きい。ボゴタのように，うすら寒い陽気の下で見ると，何となく貧相な感じを受けないでもないが，ひとたびカリブ海沿岸の熱帯の太陽の下ではラテン的な魅力となるから不思議である。同行した小久江医師によれば，脚が細いといってもふくらはぎの部分が細いということで，腰から胸にかけての上半身の豊かさは日本人とは全く異質のものだそうだ。インディオはその点はるかに日本人的で，顔は勿論東洋的だし，ふくらはぎも日本人的で親しみがもてる。ただ，インディオの子供は眼が大きくてスペイン的だが，それでもコロンビア人よりは日本人に近い感じがする。

国立大学を訪ねて

コロンビアの大学の中でも最高の学問的レベルにあるのがボゴタの国立大学である。郊外の大学都市にあって，高層建築こそないが全く広々とした公園のようなところ。米国に留学して帰ってきた人達が研究の中心になって活躍しているらしい。そのせいか研究室や実験室は狭いが設備はよく整っていた。コロンビアで英語が通ずるのは大学と高級なホテルだけだ。途端に気が楽になってベラベラと雑談した。英語とて決して上手ではないが，英語はやさしくていいなと思ったのははじめてである。

〃コロンビアは地質学・生物学の上からみると実に興味深いところ，ぜひあなた方のすばらしい国を研究させて欲しい〃と挨拶すると，彼等もにこにこして〃よく我々の国に来てくれました。どこでも調査して下さい〃と言っていた。すぐ近くに巨大な米国を控え，米国なしでは何もできないし，何でも米国に遅れをとっている。それに比べると，いくつかの面で世界的水準にある日本がうらやましいという表情だった。日本へ留学したいがどうすればよいかと，大学でもバランキリヤの町でもグアヒラ砂漠の人達からもきかれたのには驚いた。もらうだけなら何でも欲しいというきらいはあるが，日本の援助を期待している人達は確かに多い。

そう言えば，この国は中南米では随一の教育普及率とはいえ，まだ義務教育はおこなわれていな

い。ボゴタの街角には乞食や浮浪者も沢山いる。水道の水はどこでも安心して飲めない。生水だけはホテルの水道でも飲まないように注意されたが，我々もしばしば腹をこわした。人々は大体乾燥地帯に住んでいるので疾病が流行することはあまりないらしいが，統計によるとコロンビアの病気は下痢，性病，肺結核の順になっている。肺結核はインディオの間でも恐れられていて，子供でも血を吐いて死ぬことが多いと言っていた。また，工業には見るべきものはないし，走っている車も輸入制限で古い型の外車がほとんどである。幹線道路も町の近くだけしか整備されていない。どこを見ても早急になすべきことは山のようにある。その点日本では水は安心して飲めるし，電気はどこでも使えるし，国産車は洪水のように走っているのだから大したものだ。我々もやはり日本はいいなとつくずく感じた。

しかし，開発が遅々としてすすまないことをあせったり，くよくよしたりしないラテン民族気質もまた大したものである。〃マニャーナ〃(Mañana)（あすの朝）という言葉があるが，役所でも会社でも大学でさえも，午後になったり，午後から面会を求めたりすると，すべてマニャーナで押切られてしまう。そして，まあコーヒーでもと言うことになる。平日はこの調子で土・日は休みなんだからちっとも仕事がはかどらない。それに，何かたのむと実に愛想のよい返事をしてくれるが，いざ実行となるとしばしばマニャーナ，マニャーナを連発する。決していやだと言わないし，相手に不快な感じを与えるような返事をしない国民性らしい。すべてがこの調子だからのんびりしているわけである。日本人はどうも勤勉すぎるなどと言っていたが，確かに彼等から見れば我々日本人はあくせくしているように見えるにちがいない。

ともかく，コロンビアは愉快な国で人々も憎めない。約3カ月のコロンビア調査旅行を愉快に，気持だけでものんびりとやれたのは仕合せだった。日本を出発する前にどこで聴いても〃コロンビアは危険なところだ。治安が悪く，匪賊は出るかもしれないし，泥棒は沢山いる。現地の人達も護身用に武器を持っている人が多いと注意された。我々もピストルを持つ必要があるのではないかとまことしやかに論議もされた。しかし，我々の接したほとんどのコロンビアの人達は，サンタ・マルタ山群のインディオさえも我々にきわめて協力的だった。勿論，周倒な準備は必要だ。しかし，コロンビアは決して危険な国ではない。人々はこちらが真面目に接する限り，親切で世話好きであるという印象を我々一同が持ったことは今回の旅行の最大の収穫の一つであろう。

コロンビアで一番おいしいものはやはりコーヒーだった。ボゴタで初めて出された時は実のところ少しもおいしいと思わなかった元来，私は日本でもコーヒーよりは紅茶という方だ。飲みすぎて夜寝られないのもかなわないと思い，なるべく飲まないようにした。しかし，朝昼夜の食後にカフェ（Cafe）（ミルク入りコーヒー）かティント（Tint）（コーヒーのみ），どこかへ挨拶に行くたびにコーヒーと言うようにして10日もたつ頃には，すっかりなれてしまった。それどころか馬鹿においしくなってくる。日本で飲んでいる味とはちがう。何ともコクがあると感ずるようになるから不思議だ。なかでも最高の味はボゴタの国際空港でサービスしてくれるコーヒーだ。今でも帰りがけに飲んだあの味がなつかしい。

（調査隊長・静岡大学理学部）